様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月　 ７ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２３１２

研究課題名（和文）太鼓音楽の発展に関する歴史的研究ー「日本の太鼓音楽」から「世界音楽」へー

研究課題名（英文）A historical study on the development of taiko music: From Japanese to global

研究代表者
中原　ゆかり（NAKAHARA, Yukari）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：００２８４３８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　戦後日本で誕生した太鼓音楽の「発展期」（1970代-1990代）を対象に調査をおこなった。その結果、この時期の特徴として次の５点が明確になった。（１）太鼓音楽の著しい普及により、発展期後期は「太鼓ブーム」とも呼ばれた。（２）女性の打ち手が増加した。（３）太鼓職人が増加した。（４）障害者の療育として取り入れられるようになった。（５）海外へと普及し、国境をこえた交流が頻繁になった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　太鼓音楽は近年、北米のエスニシティ研究やジェンダー研究、心理学等で取り上げられるようになった。しかし、いまだ全体像はみえにくい。その全体像を太鼓音楽史という観点から明確にする本研究は、大衆音楽史、戦後社会史に貢献できるものである。また太鼓を中心に大衆レベルでのグローカルな繋がりを提示する本研究は、過去と現在を知り、未来を考えるための重要な資料として社会的に意義のあるものである。

研究成果の概要（英文）：My study targeted the developmental period (1970s through 1990s) of taiko music that emerged in post-war Japan. Research revealed the following five characteristics of the music in that period: 1) With the remarkable spread of taiko music, the later years of the era were identified as the “taiko boom”; 2) the number of female performers increased; 3) the number of taiko craftsman increased; 4) taiko music came to be used therapeutically as conductive education for people with disabilities; and 5) taiko music spread overseas and transnational collaboration grew frequent.

研究分野：音楽人類学

キーワード：太鼓音楽　組太鼓　創作太鼓　伝統　創造　世界音楽

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者は、1997 年よりハワイ日系の芸能調査をはじめると同時に、ハワイの太鼓音楽についての調査を開始した。ハワイの太鼓グループは、1980 年代に米本土の影響で始まり、日本や米本土の太鼓グループと繋がりを保ちながら、ハワイ固有の音楽によるオリジナル曲を創作して「ハワイの太鼓」というアイデンティティを持っていた。その成果は、単著『ハワイに響くニッポンの歌：ホレホレ節から懐メロ・ブームまで』（人文書院、2014）の第６章「ハワイの太鼓音楽」、および 2009~2011 年の科学研究費助成事業（科学研究費補助金　基盤研究Ｃ）「ハワイの和太鼓文化：ハワイ祭太鼓の誕生と発展」の研究成果報告書に記している。

（２）2013 年からは太鼓音楽史全体を明らかにするという構想のもとに、黎明期の太鼓音楽について調査を開始した。戦後の日本でジャズドラマーの小口大八が考案した、組太鼓（創作太鼓、太鼓音楽）の手法は、「御諏訪太鼓」で実現して広まり、最初のプログループである「助六太鼓」や、米本土で最初の太鼓グループとなった「サンフランシスコ太鼓道場」が結成された。その成果は 2013~2015 年の科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「太鼓音楽史序説：誕生から海外進出まで」の研究成果報告書に記している。

（３）続いて 2016 年からは、「太鼓音楽史序説」で扱った黎明期に続く「発展期」を調査するために、本研究課題を計画した。発展期は、国内外ともに多数の太鼓グループが結成され、現在の太鼓音楽の輪郭ができあがった時期であるため、調査・研究の必要があると判断した。

２．研究の目的

本研究課題で扱う太鼓音楽の「発展期」は、太鼓音楽が飛躍的に普及した時期である。この時期の記録としては、鼓童文化財団編『いのちもやして、たたけよ。：鼓童 30 年の軌跡』（出版文化社、2011）や林英哲『林英哲太鼓日月独走の軌跡』（講談社、2012）等、プロの太鼓打ちや太鼓集団の記録やエッセイが出版されている。しかしアマチュアの太鼓の調査・記録は少ない。1 万個をこえるともいわれる太鼓グループの全てを調査することはできないが、いくつか典型的と思われる太鼓グループを選んで調査をすすめ、この時期の太鼓音楽の特徴を明らかにするのが本研究の目的である。

３．研究の方法

（１）2013 年から調査をおこなってきた太鼓音楽に関する新聞記事や雑誌、文献等を主体とした文字資料の収集を、引き続きおこなった。

（２）収集した文字資料にもとづき、重要と思われる出来事を記憶している人がいる場合には、インタビューをおこなった。

（３）国境を越えた太鼓グループの交流の機会の一つとして、諏訪地域で数え年７年に１度開催される「御柱」の行事、および 1970 年より毎年開催されている「岡谷太鼓まつり」の参与観察をおこなった。

（４）（３）の参与観察に基づき、ヨコの繋がりがあるグループについて、現地におもむき調査をおこなった。調査の内容は、指導者やメンバーへのインタビュー、練習等の見学、現地にある文字資料や音響資料の収集である。

４．研究成果

（１）発展期には、太鼓音楽が国内外に飛躍的に普及した。発展期の初期にあたる 1970 年代は、大阪万博により太鼓音楽がマスコミやステージで取り上げられ、「御諏訪太鼓」や「助六太鼓」の海外における演奏の機会が増えていった。またプロの太鼓集団である「鬼太鼓座」（1980 年には分裂して「鼓童」が誕生している）が国内外ともに注目されるようになった。しかしアマチュアレベルの太鼓グループが日本において目立って増えていったのは、1980 年代から 1990 年代のことである。組太鼓を演奏するための太鼓セットを買い揃え、黎明期からのグループに打ち方を教わり、あるいはジャズドラマーやティンパニー奏者に作曲を依頼して、各地に太鼓グループが結成された。各地の太鼓グループは、地域の宴会や祭り、イベント、観光や祭りで演奏する機会があり、外に対しては「地域の顔」となっていった。1978 年のやまびこ国体以降は、各地のイベントで太鼓の「揃い打ち」も行われるようになり、同じ曲を演奏できるグループどうしのヨコの繋がりを見せるようになっていった。

（２）女性の打ち手が増加した。黎明期の太鼓といえば男のものであることが大前提であり、1970 年代までは女性の打ち手は珍しかった。しかし 1980 年代以降は女性の打ち手が瞬くまに増

加している。太鼓グループをつくるためのメンバーの募集や、保育所や小中高校での教育活動などでは、男女の区別は最初から問題にならなかったのである。また、数は多くないが、女性だけの太鼓グループも結成されるようになった。

（３）太鼓職人が増加した。黎明期のほとんどのグループが、いわゆる老舗の太鼓店、太鼓工房に太鼓を注文していた。しかし太鼓グループの数が一気に増えたこともあり、太鼓を注文してもすぐに届かず、皮の張り替えや修理を頼んでも数カ月がかかってしまう。太鼓工房や太鼓職人の増加は、必要にかられてというわけだが、多くはアマチュアの太鼓職人であった。また太鼓職人のルーツは、地域の神楽太鼓の製作者に習って工夫を加えたり、あるいはあちこちの店で見たものを工夫して作っていったりと、実に様々であった。

（４）障害者の療育として取り入れられるようになった。1970 年代、富岳会の指導者たちが太鼓を習い、取り入れていったのが最初である。その後障害者をメンバーとする太鼓グループが各地で結成されるようになった。

（５）海外への普及がすすみ、交流が活発になった。日本の太鼓グループが海外公演の折にワークショップを開催したことや、あるいはサンフランシスコ太鼓道場を開いた田中誠一のように日本で教わって米本土で太鼓グループを結成する例が増えていった。それぞれの太鼓グループはさらにいくつもの太鼓グループを誕生させた。そして太鼓グループは、国内外に関わらず、ヨコの繋がりを保ち、イベント等の折には国境を越えて集結し、交流している。例えば本研究期間に参与観察をおこなった「御柱」や「岡谷太鼓まつり」には、国内のみならず海外からのグループやメンバーが多数参加していた。また、北米には 1990 年代末の時点で 200 近い太鼓グループがあり、1997 年からは北米太鼓会議（Norh American Taiko Conference）が開催され、互いの技術や知識を交換している。

以上が本研究課題の調査により明確になった点である。これまで日本における女性の打ち手の増加や太鼓職人の増加は、太鼓音楽が普及したアメリカの影響を受けたものと、一般にはとらえられていた。しかし本研究課題の調査により、女性の打ち手の増加も、職人の増加も、日本の実情によりでてきたものであることが明確になった。つまり、これまでのアメリカの影響によるという一般的なとらえ方は、「鼓童」や「鬼太鼓座」等のプロのグループだけに目をむけていたためのことだったのである。さらに国内外におけるアマチュアレベルの太鼓グループのヨコの繋がりを明らかにしていく本研究課題の試みは、近年太鼓音楽を対象としている北米エスニシティ研究にも貢献できるものであると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 NAKAHARA, Yukari	４．巻 44
２．論文標題 Musical Histories of Nisei Singers,Featuring Chiyoko Ida Aoyagi of the Hawaii Shochiku Orchestra	５．発行年 2018年
３．雑誌名 The bulletin of the Faculty of Law and Letters, Humanities	６．最初と最後の頁 49-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中原ゆかり	４．巻 30(1)
２．論文標題 ハワイ松竹楽団と「別れの磯千鳥」―美空ひばり12歳のハワイ公演をめぐってー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 立命館言語文化研究	６．最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.34382/00003188	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計3件

１．著者名 中原　ゆかり	４．発行年 2018年
２．出版社 浅野太鼓文化研究所	５．総ページ数 102
３．書名 奄美の花ジマ　佐仁のわらべうた	

１．著者名 中村都、中原ゆかり、中根智子、永澤雄治、中山紀子他	４．発行年 2017年
２．出版社 法律文化社	５．総ページ数 240
３．書名 国際関係論へのファーストステップ	

１．著者名 根川幸男、井上章一、森本豊富、中原ゆかり他	４．発行年 2016年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 240
３．書名 越境と連動の日系移民教育史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考